

鯨 研 通 信



第420号

2003年12月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番5号 豊海振興ビル5F 電話 03 (3536) 6521 (代表)
 HOMEPAGE <http://www.icrwhale.org>

目次

鯨の捕獲調査は非人道的行為か？	石川 創 1
クジラ研究の「トキワ荘」時代	大木阪京魚 6
日本鯨類研究所関連トピックス (2003年9月～11月)	16
日本鯨類研究所関連出版物等 (2003年9月～11月)	18
京きな魚 (編集後記)	20
スタンディングレコード (2003年9月～11月受付)	21

鯨の捕獲調査は非人道的行為か？

石川 創 (日本鯨類研究所)

国際捕鯨委員会での出来事

2002年に下関で行われた国際捕鯨委員会 (IWC) の科学委員会 (SC) での事だ。イギリスやオーストラリア等、捕鯨に強く反対する科学者たちで構成された「南大洋鯨保護協議会」なるグループがSCに提出したドキュメントの一つが私の気を引いた。内容は彼らのグループが南半球の大型鯨の研究と保護にどれほど成果を上げているかと言ったものだったが、その中の一節に、「我々は日本の南極海鯨類捕獲調査 (JARPA) で得られたデータを使わない。何故ならば彼らの調査は倫理に反しているからである。」なる文言が含まれていたからである。私は同じIWCの技術委員会 (TC) で長年「鯨の

人道的捕殺」なる課題に関わって来ている。この問題はかつてSCで取り扱われてきたのだが、SCに漁具漁法に関する専門家が乏しいことや、何より人道性や倫理なるものが数式や統計で証明できるものでもなく、科学的議論を至高とするSCの科学者達に嫌われて議論の場所がTCに移ったいきさつがある。しかもそのTCですら、人道性や倫理に関しては不毛な議論が続いている。それゆえ、私はわざわざSCで倫理なる文言が持ち出されたことに違和感を覚えたのだ。

しかしながらこの文言は、商業捕鯨の一時停止以来十数年間にわたり南極海を往復して調査に明け暮れてきた我々日本鯨類研究所にとって、また鯨の捕殺手段向上に努力してきた自分自身にとっても、侮辱と感じるに充分だ。SC

の場ではあったが、ここは一言言わなければ気が済まない。そこで「JARPAの成果はSCでも高く評価されており、しかも致命的調査のみならず（写真による個体識別やバイオプシー標本採集など彼らが行っている手法と同様の）非致命的調査も並行して行われている。政治的な理由で有用な科学データを無視するのは遺憾だ。」とコメントしたところ、彼らは「日本の鯨類捕獲調査は科学の倫理に反するから、日本を含めて学術誌は論文の掲載を拒否しているのだ。」と主張してきた。これは事実と異なる。日本の捕獲調査の成果は毎年行われるIWCのSCにドキュメントとして報告される他、これまで様々な学術誌にも掲載公表されている。これらの中には独自の動物（実験）倫理規定を備えているものも少なくない。ただちに私は会場から電話をかけまくり、論文掲載紙の倫理規定を集めてSCで論駁した。白熱しかけた議論は、（当然のごとく）理性あるSCの議長に強引に打ち切られてしまったが、私にはこの問題が、昨今捕鯨反対の明快な科学的論点を見いだせない反捕鯨国の新たな攻撃材料と感じられた。すなわち、動物福祉の側面でクレームを付け、日本の捕獲調査を科学の場から閉め出そうという戦略である。

投稿論文の行方

それから数ヶ月後、鯨の繁殖生理の研究で長年日本鯨類研究所と仕事をしてきた帯広畜産大学の福井豊教授から、「イギリスのC誌に投稿した論文に、レフリーの一人が掲載拒否を要求してきた」と相談が来た。福井先生は特にミンククジラの人工繁殖を目指して研究を続け、毎年のようにJARPAに学生を調査員として送り込んで標本を採集するだけでは飽きたらず、ご本人自らが調査母船に乗り込んで実験を続け、とうとう船上で世界初のミンククジラ卵子の人工培養と体外授精に成功したという強者である。福井先生はまた、得られた鯨の標本から次々と国際学術誌に論文を発表し、一連の研究で学生に学位も取らせている。日鯨研にとっても、精力的に仕事を進める福井先生は強力な研究パー

トナーである。

さて、その福井研究室が投稿した最新の論文についてのクレームは、まさに「鯨類捕獲調査が動物倫理に反する」故に掲載拒否を要求したものであった。レフリーのコメントは、以下の内容に要約される。鯨は爆発銃で殺されており、これは安楽死ではなく死ぬまでに痛みと苦しみを受けている、妊娠した雌が殺されており、しかも使用された卵巣の数より多くの鯨が殺されている、民間会社の捕鯨船を使用していることは調査と称する商業捕鯨である。

これらの内容は、捕鯨に反対する外国の動物愛護団体の主張そのもので、しかも間違いだらけだ。特に、
 に関して、少しでも事実関係を調べればわかることまで反捕鯨団体の情報を鵜呑みにしている。鯨類捕獲調査（調査捕鯨）は、国際捕鯨取締条約8条に基づき、加盟国の権利で行われている。日本の場合、政府が特別許可書を発給し、日本鯨類研究所（日鯨研）が調査を委託されて、（株）共同船舶の所有する船舶を用船して行われている。民間会社の船を使ったから商業目的だという批判はあまりにも短絡的発想だ。また南極海で行われるJARPAの場合、鯨類の管理に必要な生物学的な情報を収集する事や、南極海生態系における鯨類の役割の解明などを目的としており、広大な海域に分布するミンククジラ資源を代表する標本を収集するために無作為抽出法（ランダムサンプリング）が採用されている。従って統計学的検定に耐えうる十分な標本数（JARPAの場合毎年400±40頭）を確保する必要があるのと同時に、性や成熟度、年齢などで偏ったサンプリングを行うことはできない。ましてや調査が帯広畜産大学の研究標本確保のためだけに行われているわけではないことは自明の理だ。正直なところ、この程度の認識しかない人間がレフリーとして調査捕鯨にコメントしていることに失望した。

鯨の捕殺手段は非人道的か

さて、では の、鯨の殺し方は実際に残虐で、動物福祉に反し、科学調査の倫理に適合しないのであろうか？

現在、日本の鯨類捕獲調査では鯨の捕殺手段として、1次的捕殺手段としてペンスリット導爆線を銃先に搭載した75mm爆発銃を使用する、1次的捕殺手段で即死しなかった個体については迅速に2次的捕殺手段を行使する、2次的捕殺手段は、大口徑ライフルと2番銃を、鯨の種類と1番銃命中後の鯨の状態及び周囲の状況に応じて選択する、ライフルは口径9mm以上のフルメタルジャケット弾を使用する、等を義務づけている。

鯨の捕殺に爆発銃を使用することは国際捕鯨取締条約の附表第3条によって定められており、これは鯨の人道的な捕殺に配慮しているためである。IWCはその長い歴史の中で鯨に対して人道的な捕殺手段を模索し続け、多くの国の科学者達の真摯な努力と研究の結果、電気銃や化学薬品など様々な手法の中から爆発銃が最も人道的かつ効果的な方法であると結論した。またIWCの人道的捕殺技術委員会が1980年に開催したワークショップでは、日本がミンククジラ捕鯨用に開発したペンスリット爆発銃について、「優れた爆発力と安全性を兼ね備え、鯨に迅速かつ人道的な死をもたらず優秀な能力を持つ」と認定している(石川、2000)。近年では、すでに商業捕鯨を再開しているノルウェーが新型の爆発銃の銃先(グレネード)を開発して、ミンククジラの致死時間短縮に効果を上げている。日本もこのノルウェー製新型グレネードを実験的に日本の銃に装着し、従来の爆発銃より高い殺傷効果が得られるかを研究中である。また2次的捕殺手段にライフルを導入後は、弾種による殺傷効果の違いや射撃位置などに関して詳細な研究がなされ、致死時間の短縮が図られている(Ishikawa, 1999)。要約すれば、鯨類捕獲調査は、国際捕鯨委員会が認めた正しい鯨の捕殺手段を用いて行われており、動物福祉に対しても十分な配慮が払われているのだ。

それでもなお、鯨の捕殺は致死時間が長いから残虐なのだとの批判がある。日本の捕獲調査における即死率はミンククジラで33 - 44%、致死時間(中央値)は130 - 180秒(過去4年間の値)で、捕殺技術を向上させる様々な努力の結果、近年では連続的に致死時間が短縮する傾向

にある(石川、2001)。しかし実際のところこれらの値が良いか悪いかを判断するのは困難と言わざるを得ない。なぜならば比較対照とすべき大型野生動物の捕殺に関するデータがあまりにも乏しいからである。

例えばアメリカでは年間560万頭の鹿が、オーストラリアでは年間200万頭以上のカンガルーが狩猟や間引きの目的で殺されているが、これらの動物の致死時間については全くと言っていいほど公表されていない、と言うよりおそらくはデータすら収集されていない。イギリスが1999年のIWCワークショップに提出した資料によれば、スコットランド鹿協会は年間平均6万頭狩猟される鹿の捕殺データが存在しないことを認めている(Government of UK, 1999)。2001年に日本鯨類研究所はアメリカのMadelia Research Facilityに依頼して動物の人道的捕殺に関する既存のデータ検索を行ったが、大型野生動物の狩猟に関する有益な情報はほとんど得る事が出来なかった。わずかに見つかった文献で比較をすれば、例えばHolsworth(1973)は、オンタリオ州の島に棲息するオジロジカに対して行われた個体数調節のための狩猟結果について述べている。致死時間の記録はないものの、銃の一発の射撃で10m以内に倒れた個体(即死とは限らない)は156頭中59頭(37.8%)で、161頭に対する射撃で11頭(6.8%)が手負いの状態で失われたと報告している。またGarland(1972)は、鹿のボウ(弓矢)狩猟の聞き取り調査で、173頭中70頭(40.5%)が矢の命中後50ヤード(46m)以内で死んだと報告している。Øen(1995)は、自らのライフルによる狩猟経験から得られた結果として、トナカイ105頭の致死時間(中央値)は約1分、即死率が21%であったと述べている。これらの結果は、鯨のデータと直接比較はできないものの、大型野生動物の狩猟と鯨の捕殺において致死時間や即死率に大きな違いがないように見える。

鯨に限らず、野生動物は管理された室内で飼育された実験動物ではない。致死調査では狩猟の方法を取らざるを得ず、その捕殺結果は即死とは限らない。IWCは過去何回か鯨の人道的捕殺の定義を行っており、最近では1980年のワー

クショップの報告で以下のように述べられている：「実際の定義として、人道的捕殺とは、動物に関知されるような痛み、ストレスもしくは苦悩をおこすことなく死に至らしめるということで合意された。それは理想的目標である。あらゆる人道的捕殺は、まず動物を技術的に可能な限り迅速に、苦痛に対して無感覚にすることを目指している。実際上これは科学的な意味では即時ではあり得ない」(IWC, 1981)。すなわち人道的捕殺とは致死時間が短いこと、また短くする努力を払うことと言い換えることが出来る。これは後述するように他の陸上野生動物の捕殺に求められている基準と変わるところはない。

科学の倫理

捕殺方法に陸上野生動物と大きな差がないとすれば、鯨類捕獲調査が科学の倫理に反しているとする理由は他にあるだろうか。

鯨に限らず、野生哺乳類の調査において致死調査はしばしば用いられる手法の一つである。野生動物の致死調査について、Friendら(1994)は米国野生生物学会が編纂した「野生動物の研究と管理技術」の中で、「動物の採集は野外研究においてしばしば重要な要素である。これらの研究は動物分類学、比較解剖学、疾病のアセスメント、餌嗜好性の研究、環境汚染の評価および多くの他の正当な理由と科学的必要性が含まれている。」と述べ、その必要性を明快に認めている。また大隅(1991)は、鯨類の資源調査の手法として致死調査と非致死調査の長短所を比較し、両者を組み合わせることによって調査研究が進展することを指摘している。

Friendらはさらに致死調査計画を評価する条件として、標本から得られる科学データが過去の文献で得られる情報で代替できないことや、過去すでに採集され利用可能な標本が存在しないこと、必要な情報が他の非致死的手法では得られないこと、目的以外の種の捕獲可能性を最小にすること、捕獲される標本は可能な限り早く殺されること、標本採集は目的に添って年齢層毎に行うなどの的確な手法で行

われること、等を挙げている。実はこれらの条件はほとんどすべて、IWCのSCが独自に定めている捕獲調査のガイドライン(Donovan, 2001)に含まれている。SCガイドラインでは更に、調査目的が資源管理に必須の情報に貢献すること、標本の数や性別などが目的の達成に適切であること、捕獲によって対象種の系統群に影響を及ぼさないこと等、数多くの項目が定められている。鯨類捕獲調査は条約の規定で加盟国政府が独自に許可を発行できるが、SCでは事前に提出された調査計画書をこのガイドラインに沿って詳細に吟味し、計画者は加盟国科学者たちの質問や意見に対して誠実に答えることが求められている。

要約すれば、調査の計画は国際政府機関であるIWC/SCにおいて科学者の詳細なレビューを受けており、鯨類捕獲調査は他の野生動物の致死調査の手法と比較しても正当であり、致死調査であるが故に科学の倫理に反しているという批判は的はずれである。

鯨だけは特別か

実際の所、鯨の捕殺が残虐であるという批判は、どんなに言葉を尽くしてみても無くなることはないだろう。捕鯨に嫌悪を示す人々にいかに数値や比較文献を示して捕殺の正当性を語ったところで、銚子を撃たれて血まみれになった鯨の映像の前では説得力に乏しい。人間の感情とはそういうものである。しかし動物愛護週間のポスターに牛の屠殺や鹿の射殺現場は出てこないし、害獣として何百万頭も殺されるカンガルーは鯨愛護の国における観光のシンボルである。犬猫を友とし、スーパーマーケットで食肉を買う一般市民の誰が好んで動物を殺し、またその現場を見たがるであろうか？捕獲調査に反対する動物愛護団体は鯨の捕殺現場や解体現場の写真を好んでばらまくが、人々の不快感をおりたてて正義を主張するプロパガンダの手法は感心できるものではない。

我々は自然科学を学んだ科学者である。倫理の基準は国により、文化により、目的により様々に異なるが、一時の感情ではなく科学とい

う基準で動物福祉や倫理を語るときに、鯨だけを特別視することには正当な理由が存在しない。捕鯨に反対あるいは賛成という意見はまったく個人の自由である。大切なことは、ここで問題にしているのは捕鯨の是非ではなく、鯨の捕獲調査が科学の場における致命的調査方法として正当か否かであるという事だ。両者を混同してしまうと、問題点を鯨に関わる泥沼的議論にどっぷりと沈める事になり、答えはおそらく永遠に得られないであろう。

さらに重要なことは、もし科学者が正当な理由無く鯨の致死調査を否定してしまうと、他のすべての野生動物研究に重大な影響を与える危険をはらんでいることである。理屈から言えば、鯨に対してしばしば求められる捕殺の条件（例えば100%の即死）をクリアできない野生動物の致死調査は、対象がモグラであろうが鹿であろうがすべて否定されることになる。冒頭に登場した日本の捕獲調査を批判する科学者達が、この点についてどういう見解を持っているか興味深いところではあるが、納得できる科学的根拠を示す事無く鯨を特別視する態度は、彼らの多くが鯨類研究の科学者としてそれぞれの分野で高い評価があるだけに理解に苦しむところだ。

公正な評価を得るために

帯広畜産大学の投稿論文へコメントしたC誌には、（論文に対する純粋に科学的な意見への対応は別として）徹底的な反論と共に、同大学の動物実験委員会が発行した倫理に関する認定書を添えた。その後C誌は1年近く経過した本年（2003年）6月になってようやく返答をして来た。返答の遅れをわびる編集主幹の文面は、論文の掲載について関係者の間でかなり激しい議論があった事を窺わせた。しかしながらその内容は、JARPAが法的に正当であることは認められたものの、依然として爆発銃による捕殺の人道性に疑問を呈しており、さらにはJARPAが捕獲している標本数全体についても正当性の証明を求めるものであった。一方でC誌は、過去に個体群管理のために間引きされたアフリカ象（象

牙と肉が販売されている）から得られた標本を使った投稿論文を掲載したことを認めており、「（爆発銃の人道性、殺される動物の数等）捕殺手段が倫理にかなっているか否かは、得られるデータの価値を証明することによって判断される」との苦しい見解を示している。

象の捕殺手段は鯨ほど詳細にレビューされているのか？屠畜場で牛から標本採集している研究者は屠殺される牛の頭数と利用目的が正当か証明しているのか？などと皮肉はいくらでも考えつくが、掲載を拒否されたわけではないので、C誌には冷静に当方の爆発銃に関する見解とJARPAにおける捕獲頭数の根拠となる文書を添えて再投稿を行った。

しかしC誌の審査の行方が最終的にどうなるにせよ、問題がこの一件だけで収まらないのは明らかである。もし私がSCで危惧したように、反捕鯨活動の戦略として捕獲調査の倫理問題が取り扱われているのであれば、今後も同様な問題は数多く発生するであろう。現在日鯨研では、その対策の一つとして、鯨類捕獲調査が野生動物の致死調査の手法として正当であることを第三者たる学術団体に証明してもらった作業を進めている。これは鯨類捕獲調査を科学的側面と捕鯨に関わる側面とに切り離して議論するための重要なステップとなるだろう。当然の事ながら、この作業の中では前述の「野生動物の研究と管理技術」の中で示されているような調査計画の評価や捕殺手段の倫理性が、作業を行う学術団体が定める基準の中で問われることになる。長く日本の鯨類捕獲調査に関わって来た者の一人として、近い将来に公正な評価が内外に示されることを願ってやまない。一方我々自身も、外部の評価に耐えうる科学調査を維持するために、技術手法の開発向上を怠ってはならない。捕殺手段に関して言えば、現在鯨類捕獲調査で用いられている爆発銃はIWCが認めた最も人道的な道具であるものの、我々科学者は大型野生動物の致命的調査を行う者として、より動物福祉面に配慮した捕殺手段の研究改良に常に取り組む義務があると信じる。

（本文は日本野生動物医学会機関誌「ズー・ア

ンド・ワイルドライフニュース」No.15 (2002)に掲載された同名記事に加筆修正したものである)

引用文献

- Donovan, G. 2001. Guidelines for the Review of Scientific Permit Proposals. *J. Cetacean Res. Manage.* 3 (Suppl.) 371-372.
- Friend, M., Toweill, D.E., Brownell, R., Nettles, V.F., Davis, D.S. and Foreyt, W.J. 1994. Guidelines for Proper Care and Use of Wildlife in Field Research. *In* Research and Management Techniques for Wildlife and Habitats. (Bookhout, T.E. *edt*) The Wildlife Society, Bethesda. 96-105.
- Garland, L.E. 1972. Bow hunting for Deer in Vermont; Some Characteristics of the Hunter, the Hunt and the Harvest. A contribution of Federal Aid in Wildlife Restoration, Project W-34-R. Presented at the Northeast Fish and Wildlife Conference, Ellenville, New York, May 16, 1972.
- Government of UK. 1999. Control of deer in Scotland. The information paper 4 presented to the Workshop on Whale Killing Methods, Grenada, 17-19 May 1999. (unpublished).
- Holsworth, W.N. 1973. Hunting Efficiency and White-Tailed Deer Density. *J. Wildl. Manage.* 37(3):336-342.
- Ishikawa, H. 1999. Research activity on whale killing methods in the Japanese Whale Research Program in the Antarctic Sea and Northwestern Pacific Ocean (JARPA and JARPN). The paper IWC/51/WK16 presented to the Workshop on Whale Killing Methods, Grenada, 17-19 May 1999. (unpublished).
- IWC. 1981. Report of the Workshop on Humane Killing Techniques for Whales. Paper IWC/33/15 submitted to the 33rd IWC Technical Committee, July, 1981. (unpublished).
- Øen, E. 1995. Animal Welfare Considerations in the Killing of Large Mammals in Europe (Euthanasia, Slaughter and Hunting). Paper IWC/47/WK10 presented to The Workshop on Whale Killing Methods, Dublin, 23-25 June 1995. (unpublished).
- 石川創. 2000. 人道的捕殺とは何か - 捕鯨と動物福祉 - . 鯨研通信408 . 7-17 .
- 石川創、重宗弘久、油津訓 . 2001 . 捕鯨と動物福祉 - 日本の捕獲調査における人道的捕殺への取り組み - . 第7回日本野生動物医学大会発表 . 日本大学 .
- 大隅清治 . 1991 . 国際捕鯨委員会の活動と鯨類資源調査研究の変遷 . *In* 鯨類資源の研究と管理 . (桜本・加藤・田中編) 恒星社厚生閣 . 東京 . 1-21 .

クジラ研究の「トキワ荘」時代

大木阪京魚 (フリーライター)

はじめに

漫画を愛好する中年以上の者にとって、「トキワ荘」は忘れることのできない歴史的建造物である。この東京都豊島区椎名町の一角にあっ

た建物は、第二次大戦直後に建築された、木筋モルタル二階建てのしがないアパートではあったが、ここから寺田ヒロオ、手塚治虫、藤子不二夫、石ノ森章太郎、水野英子、赤塚不二夫、園山俊二らの戦後の一時期日本の漫画界をリー

ドし、その後も後輩たちに強い影響を与えた、「新漫画党」の優れた漫画家を輩出し、「漫画荘」とも、「漫画家の梁山泊」とも言われ、後に漫画愛好者によって「漫画のメッカ」と崇められた。

ところで、クジラの研究でこの「トキワ荘」に比肩するのが、現在の日本鯨類研究所の前身である、東京都中央区月島西河岸通り12丁目に1947年に創立された当時の、鯨類研究所であったといえよう。この研究所も「トキワ荘」と同様に、第二次大戦中に建築された、木筋モルタル二階建ての粗末で古びた建物であったけれども、戦後日本の鯨類資源調査研究の基礎を築き、世界的に活躍した、大村秀雄、西脇昌治、水江一弘、藤野和男、根本敬久、大隅清治、市原忠義、奈須敬二、粕谷俊雄といった、錚々たる鯨類学者がこの貧しい建物から輩出した。

鯨類研究所は土地、建物の所有者であった大洋漁業株式会社の社内事情により、1965年7月に西河岸通りの地を離れ、江東区深川越中島1丁目にあった大洋漁業の食品工場の一角に移転した。日本の鯨類研究史の中で一時代を画した、この約18年にわたる西河岸通りでの鯨類研究所を筆者は“クジラ研究の「トキワ荘」”と称し、この時代の日本の鯨類資源研究の足跡を振り返り、そこで調査と研究を懸命に進めていた所員たちの活躍の一端を記録に留めたい。

鯨類研究所の創立まで

財団法人・鯨類研究所の前身は、捕鯨生産物の有効利用を目的として設立された、中部（なかべ）科学研究所である。この研究所は、林兼商店、大洋捕鯨株式会社、中部幾次郎の寄付金総計50万円を基金として、東京都中央区月島西河岸通12丁目4番地（1965年4月から地番変更により中央区勝どき5丁目8番24号となった）において、太平洋戦争真只中の1942年4月に、花王石鹼株式会社の研究室長であった丸山勉を所長に迎えて、発足した（徳山、1992）。この研究所は農林省水産局の水産試験場と道路を隔てた、約600坪の敷地に設置され、240坪の木造2階建ての5つの実験室、写真暗室、図書室、

標本室と、工作室、動物飼育室、倉庫が建てられた。

中部科学研究所の発足当時は鯨油の化学研究が主体の私立研究所であったが、戦雲急を告げるに伴い、技術院を主管官庁とする財団法人組織とし、研究所の事業は戦力の強化に直接結びつくテーマへと転換していった。研究所の創立と事業の発展に付いては、丸山（1959）と大洋漁業の元社員の徳山宣也（1992）の記述に詳しいが、中でも鯨油を原料とした航空潤滑油の研究は技術院に高く評価されたという。しかしながら、その研究は製品としての完成を見ずに敗戦となり、研究所は幸いにも戦災に遭わずに残ったものの、技術院傘下で軍事色が強かった中部科学研究所は、敗戦直後の1945年9月30日に解散した。そして、研究員と敷地・建物はそのまま残し、同年10月1日に「林兼商店製菓工場」から社名を変更した、「林兼水産工業株式会社」が設立され、中部科学研究所はこの会社の研究部門として再出発した。

さて、日本の近代捕鯨は1899年に、ノールウエーから汽船に捕鯨砲を備えた捕獲技術の導入に成功して以来、外地を含む日本の各地に沿岸捕鯨基地を拡大し、1934年からは南極海母船式捕鯨が開始され、1940年には北洋母船式捕鯨にまで発展した。しかし、鯨類資源調査・研究は捕鯨業の発展過程に伴わず、太平洋戦争の敗戦を迎えるまでは、日本には鯨類資源を扱う研究所は存在せず、南極海の母船式捕鯨が開始されて間もない、1935年頃から松浦義雄、大村秀雄などの農林省水産局の捕鯨担当の行政官によって行政の片手間に細々と調査・研究が行われていた。大村は東大医学部の小川鼎三らが行った鯨類の個体生物学に対して、クジラの資源生物学を「第二鯨学」と称した（大村、1986）。それでも彼らは、当時において鯨類資源に関する優れた研究業績を数多く上げていた。戦争によって日本の捕鯨業は壊滅的打撃を受けたが、敗戦後の日本の深刻な食糧難を解決する一助として、占領軍の総司令部（GHQ）はいち早く、1945年9月には沿岸捕鯨を再開させた。それと同時に、GHQは捕鯨再開の許可条件として、政府による捕鯨操業の監督の強化と、鯨類の資

源調査研究の実施を義務付けた。

GHQの指導を受けて、当時水産局の捕鯨班長であった大村は、農林省付属の水産試験場長であった春日信市と図って、水産試験場で鯨類資源研究を開始することにし、担当の研究官として、末広恭雄（後に東大農学部教授、魚学）を任命した。しかし、当時の捕鯨業界は、操業の許可と取り締まりを担当する行政官には弱いけれども、許可や取り締まりに直接関係しない研究官には非協力であった。そのために、もともと末広はクジラの専任でなく、サカナに興味が強かったこともあって、この状態に嫌気がさして、間もなくクジラ研究を放棄して東京大学に移って、国立研究機関におけるクジラ研究の場の芽は無残に摘み取られてしまった（大隅、1992）。歴史に仮定は許されないが、もしも大村によって「第二鯨学」の創始者とされ、鯨類資源生物学に優れた業績を上げた、水産局の松浦が敗戦直前に結核で病死せず、あるいは末広がクジラの研究を続けていれば、その後の日本の鯨類資源研究の歴史は大きく変わっていたかもしれない。それはともかくとして、戦後しばらくの間鯨類資源の調査研究を実際に進めたのは、戦前と同じく、水産局の捕鯨担当の行政官であった。そして彼らは、捕鯨行政、監督業務の傍ら、鯨類の資源調査に励んだ。

食糧危機打開の責務を背負った、日本捕鯨の戦後の復興振りは、政府の手厚い援助もあって目覚しく、1946年の春には小笠原母船式捕鯨が開始され、次いで同じ年の秋には南極海母船式捕鯨の再開へと発展していった。

急速な日本の捕鯨の発展に伴って、国際的な鯨類資源研究は行政官の片手間ではできないことが関係者によって自覚された。そこで、国立の鯨類資源研究機関の設立に失敗した農林省水産局は、民間の鯨類研究機関の設立を捕鯨業界に強く働き掛けた。大洋漁業株式会社がこれに応え、100%の設立基金を提供するとともに、旧中部科学研究所の土地と建物の一部を貸与して、1947年9月1日に農林省を主管官庁として、財団法人・鯨類研究所（鯨研）が創立された。ここに、1952年から始まった漫画の「トキワ荘」よりも早くに、クジラ研究の「トキワ荘」が誕

生したのである。しかし、鯨研は敷地、建物を自前のものとしたわけではなく、最初から林兼水産工業株式会社の研究部と同居した。因みに母船式、大型の捕鯨業者の団体である「日本捕鯨協会」は、鯨研の設立から遅れて、1948年2月に鯨研とは独立に、丸ビル内の1室に設立された。

クジラ研究の「トキワ荘」時代の発展

創立当時の鯨研は、理事長兼所長に中部科学研究所から引き継いだ丸山勉、総務担当の常勤理事に同じく奥田久司、非常勤理事には大村秀雄（水産局捕鯨班長、鯨学）、小川鼎三（東大医学部教授、解剖学）、秋谷七郎（東大医学部教授、薬学）、評議員に平田森三（東大理学部教授、物理学）、宇田道隆（東京水産大学教授、海洋学）などが任命され、当代一流の学者を役員とし、所員には俵正（化学）、中井正（化学）、石川安太郎（化学）、吉田正巳（化学）、西脇昌治（水産学）、水江一弘（水産学）、大野瑞穂（水産学）、中島将行（水産学）などを擁して、研究が発足した。因みに、鯨研のロゴマーク（図1）は、所員の俵が考案した。



図1 鯨類研究所のロゴマーク

国際的には、戦後いち早く世界の捕鯨は復興し、急速に発展した。それを受けて、国際捕鯨取締条約（ICRW）が1946年12月に15カ国によって米国ワシントンで署名され、国際捕鯨委員会（IWC）が1948年に英国ロンドンに設立され、その翌年には第1回IWC年次会議がロンドンで開催された。しかし、占領下の日本はこの条約

起草の会議に参加できず、IWC年次会議にも最初は参加できず、GHQの職員が第1回から日本国を代表するオブザーバーとして参加した。そして、IWCを通じて得られた、世界の捕鯨の発展に伴う鯨類資源研究の進歩は、鯨研の活動に大きな刺激を与えた。

鯨研の創生期においては、理事である小川教授の熱心な指導により、東大医学部解剖学教室の俊優であった、中井準之助、細川宏、山田致知、大江規玄、神谷敏郎などが進んで鯨類の解剖学的研究を精力的に進め、鯨類研究所の所員との研究交流が盛んであった。中でも細川と山田は船医として南極海捕鯨に参加して、優れた記録を残している。小川教授は戦前から脳の解剖学を通じて、大村によって「第一鯨学」と分類された、日本産鯨類の近代的分類学、解剖学を創生、発展させてきた、日本の鯨類形態学の権威であった（小川, 1950）。

鯨研の創立後間もなく、水江は1950年に学制改革の下で発足した長崎大学水産学部教授として転出し、また儀、中井、安田、吉田は大洋漁業中央研究所に、大野は大洋漁業本社へ、中島は北海道立水産試験場に、それぞれ移動し、事務員の神保久子は退職して郷里に帰った。それを補って、同年から東大農学部水産学科出身の藤野和男（遺伝学）が研究員として採用され、やがて所員に昇格した。そして、渡辺和子、小島良子が事務員として採用された。さらに、1954年に大村が研究第一課長を最後に、水産庁を退官して鯨類研究所に迎え入れられ、翌年に退任した丸山に代わって理事長兼所長に就任した。ここに研究所の事業は最初の化学主体から生物学主体に大きく転換して、世界でも珍しい民間の鯨類資源の専門研究所として発展した。

大村が所長に就任したのを契機にして、鯨類研究所は創生期から成長期に入った。それまでに日本沿岸の大型捕鯨は急速に復興し、小型捕鯨は1948年に農林大臣の許可制となり、南極海捕鯨の規模は次第に拡大し、北洋母船式捕鯨も1952年に再開されていた。まだ占領下であったにもかかわらず、日本は1950年4月にICRWに加盟を許され、翌年2月に加入が閣議決定された。ついで、その年にロンドンで開催された、

第3回IWC年次会議の科学小委員会会議に、大村が日本代表として初めて参加し、鯨研は一層国際色を増して行った。

藤野は学部学生時代にアルバイトとして水江の研究資料の整理を手伝ったのが機縁で1950年に就職した。1951年には東大農学部水産学科の学生の木村清治が、組織標本作成のアルバイトとして雇われて、研究所に入り浸るようになり、彼は指導教官である水産学科助教授の日比谷京（魚類生理学）の許可を得て、西脇の直接指導の下で、卒業論文も研究所で作成した。そして、これが彼の最初の学術論文となった。木村は卒業後、東大の大学院に進学し、修士課程、博士課程へと進んだが、その間、本郷のキャンパスには殆ど通学せず、専ら鯨研で臨時職員として、捕鯨船団に乗船したり、沿岸捕鯨基地に滞在したりして、資源調査に明け暮れして過ごした。

1953年には東大農学部水産学科大島泰雄研究室を卒業した根本敬久が研究員として採用され、翌年には、同じ学科の末広恭雄研究室を卒業した市原忠義と東京水産大学宇田道隆教室卒業の奈須敬二が採用された。大学院博士課程を修了した木村は1958年に晴れて正規の所員となり、結婚して大隅と改姓した。さらに1961年には、研究所で西脇と大隅の指導で東大水産学科の卒業論文を作成した、日比谷研究室出身の粕谷俊雄が、「トキワ荘」最後の住人として採用された。ここに鯨類生物研究の「トキワ荘」の歴代の正規の所員は、大村、水江、西脇、藤野、根本、大隅、市原、奈須、粕谷の9名を数え、東京水産大学卒業の奈須を除いて、残りの8名が東京大学農学部水産学科の卒業生で占められていた。そして、それぞれの所員がそれぞれの新たな研究分野を懸命に切り開いて大活躍し、9人の全てが農学博士の学位を得ている。

他に、小森三好、井谷清三郎、小島利子、浅見（後に永吉）トヨ、井上千代子が事務員として、渡辺（後に加笠）和子が秘書兼司書として、研究助手として森田和子、赤坂（後に粕谷）和子、津守貞子がそれぞれ採用され、それ以外に佐藤孝、田中、高橋などの臨時職員もいて、鯨類研究の黄金時代を築いた。図2は1959年11月

に「トキワ荘」の玄関前で撮影した、当時の研究所の役職員たちである。

なお、水産庁の川上武彦は水産庁の行政官ではあったが、鯨研によく出入りし、大村の指導の下で標識調査を熱心に進め、研究員のようにみなされた。



図2 鯨類研究所の役職員

(前列左から：根本、赤坂、大村、渡辺、井谷、中列左から：田中、小島、津守、藤野、後列左から：西脇、小森、大隅、奈須、市原、高橋、佐藤)(加笠和子氏提供)

「トキワ荘」時代の終焉前後

日本の捕鯨は1950年代後半に急速に拡大するとともに、母船式捕鯨、大型沿岸捕鯨を営む捕鯨会社で構成される日本捕鯨協会は、1959年12月に機構改革が行われ、鯨類研究所は日本捕鯨協会(藤田巖理事長)の付属機関となり、大村が鯨研所長と日本捕鯨協会理事を兼ねた。それに伴って、鯨研のスポンサーには、それまでの大洋漁業株式会社だけでなく、日本捕鯨協会の会員である、日本水産株式会社、極洋捕鯨株式会社、日本近海捕鯨株式会社、日東捕鯨株式会社が加わり、鯨研所員の船団や沿岸基地での資源調査がやりやすくなった。

鯨研は日本捕鯨協会の傘下に入ったが、「トキワ荘」時代も、越中島時代も、研究所の土地は大洋漁業の所有であった。鯨研は捕鯨が隆盛

を誇っていた時代に、大きな利益を上げていたスポンサーであるそれぞれの捕鯨会社から相応の寄付金を募って、自前の土地を取得し、そこに研究所の建物を建設するべきであった。実際に、大村はその計画を立てていたらしいが、それが実現しない中に、日本の捕鯨業界は1960年代中期に入って縮小方向に転じて、残念ながら自前の研究所建設の機会を逸してしまった。そして、大洋漁業は合理化の一環として、勝どきの土地を売却することになり、江東区深川越中島1丁目3番地にあった大洋漁業の食品工場の一角の土地が代替地として鯨研に貸与され、そこにやっと小さな2階建ての建物を新築して1965年に移転し、日本捕鯨協会も丸ビルから移って同居することになった。かくして、貧しくとも華々しい研究活動をしていた「トキワ荘」時代は終わりを告げ、鯨研は第2期の時代に入った。

「トキワ荘」時代が終末を迎える前後の鯨研では、日本の捕鯨業の衰退と国の遠洋漁業政策の強化の影響をまともに受けて、所員のリストラが始まり、所員は次々に鯨研を離れていった。まず、藤野が研究所移転の前年の1964年に、米国政府の中部太平洋区水産生物研究所に招聘されてハワイに去った。次いで1965年に、西脇は東大海洋研究所に新設された資源生物部門の教授として採用されて退職した。次いで、大隅、市原、奈須の3名は水産庁に新設される予定の遠洋水産研究所に移ることになり、1966年にひとまず、東海区水産研究所に転職した。根本は1967年に東大海洋研究所プランクトン部門の助教授として採用され、粕谷も海洋研究所の資源生物部門の助手として、西脇の下で研究することになった。また事務員の小島と研究助手の森田は1965年に、秘書の渡辺は1967年に退職した。かくして、鯨研には大村だけが残り、鯨研の陣容は、「トキワ荘」時代の終わりの前後に大きく変貌を遂げ、研究所は存亡の危機に立たされた。

「トキワ荘」での研究生活

近代捕鯨の発達、特に1920年代の南極海にお

ける母船式捕鯨の急速な発達とともに、鯨類資源の合理的管理の必要性が主要捕鯨国であるノールウエーや英国で自覚され、生態学と漁業資源学に基づく鯨類資源の調査研究が開始された。英国は1924年にディスカバリー委員会を発足させて南極海の海洋学と鯨類の生態学的調査研究を開始した。一方、ノールウエーは1929年に国際捕鯨統計局を設立するとともに、オスロ―大学内に鯨類研究組織を設立し、鯨類の漁業学的調査研究を開始した。

前述のように、戦前の日本では南極海捕鯨に参加した1930年代後半から農林省水産局の行政官によって鯨類資源調査研究が開始された。大村秀雄は捕鯨の歴史と欧米の鯨類資源調査研究の成果を基にして「鯨類」(1942)や「鯨 その科学と捕鯨の実際」(共著、1942)などを出版し、松浦義雄は鯨類資源調査結果を水産学会誌に研究論文として活発に発表するとともに、解説書として「海獣」(1943)、「鯨」(1944)を出版している。さらに小川は、「鯨の話」(1950)を出版した。

鯨類研究所の生物部門の所員は、まずそれらの著書を基礎知識として学び、英国の「Discovery Reports」誌とノールウエーの「Hvalradets Skrifter」誌、「Hvalfangs Tidende」誌に発表された鯨類資源と捕鯨に関する研究論文をテキストとして徹底的に勉強した。そして、それらの調査研究手法を基にして日本独自の「鯨類資源調査の手引書」、「鯨類資源調査野帳」、「鯨類生物調査台帳」を作成した。所員たちはそれらを捕獲鯨類の生物調査の教科書と野帳として、捕獲鯨の生物調査に従事する捕鯨監督官を指導したほか、自らもそれらを携えて、沿岸の大型、小型捕鯨と南極海と北洋の母船式捕鯨操業に積極的に参加して、生物調査と標本採集を懸命に実行した。それらの調査の結果は毎漁期後「調査報告書」として速報するとともに、研究結果は鯨類研究所の研究報告である「Scientific Reports of the Whales Research Institute」誌に報告された。さらに各人によってそれらの研究結果を解説した書き物は、研究所の月刊ニュース誌である「鯨研通信」に紹介された。そして、鯨類科学の解説パンフレット

として、不定期ではあるが、「鯨研叢書」を出版した。

戦後間もない「トキワ荘」時代の鯨類研究所には現在のように、優れたパソコンもなければ、コピー機もなかった。また、標本分析・作成を依頼できる会社もなかった。所員たちは調査から帰ると、自分で標本を処理し、測定し、暗室で写真を現像、焼付けし、データを手集計し、タイガー計算機を手で回して計算した。参考文献は手書きで写し、資料はガリ版で謄写印刷した。研究論文は自分でタイプライターを使って印字するか、所長秘書、図書司書、タイピストの3役を兼ねた、有能な渡辺に頼んで手書きの原稿をタイプしてもらったりした。それでも、所員たちの研究成果の生産性は極めて高かった。



図3 鯨類研究所内での鯨肉試食会
(加笠和子氏提供)

「トキワ荘」時代の鯨研は、スポンサーであった捕鯨会社が“金も出さなかった代わりに、口も出さなかった”ので、大村所長の放任主義の下で、自由の精神が横溢していた。研究対象も捕鯨対象の大型鯨類に限らず、小型捕鯨とイルカ漁業の対象種の小型鯨類から、鰭脚類、海牛類にまで及んだ。所員は、毎日昼食を取りながら、「談話会」と称する何でも話題にする気楽なミーティングを持っていた。また、所員はよく勉強すると同時に、よく酒を飲んだ。当時は現在のように楽しみの手段が多様化、個人化していなかったこともあり、酒を呑む時も纏まりがよかった。図3は日本政府の特別許可によって鯨研が捕獲調査で採集したセミクジラの調

査後の副産物である赤肉を味覚試験材料にして、研究室で始まった酒盛りの様子である。また、春と夏には所内旅行もよくやって、大いに親睦を図ったり、毎年正月2日には大村所長の家での年始の会に集まったりして、研究所は貧しくとも、家庭的な温かい雰囲気であった。さらに鯨研は、外国にも研究の門戸を開き、何人かの外国人研究者が短期、あるいは長期にわたって鯨研に滞在、研究していて、開放的、国際的であった。

「切磋琢磨」の言葉はいまや死語になっているようだが、大村、西脇の大御所は別格として、藤野、根本、大隅、市原、奈須の5名は年齢が近く、互いに他には負けまいとして、必死に調査と研究に打ち込み、それぞれ新たな専門分野を苦心しながら独自に開拓していった。大村は骨学と分類学、西脇は広範囲な海獣学と水族館学、藤野は遺伝学、根本は食性学、大隅は資源生物学、市原は生物工学、奈須は海洋学、粕谷は形態学の道を切り開いた。かくして鯨研の「トキワ荘」時代における鯨類の生物学的研究は、初期の星雲状態から次第に種々の分野に研究が分離、発展してきて、現在の鯨類資源研究の基礎がこの時代に築かれた。そして、研究成果は当時の世界の鯨資源生物学をリードするに至った。

IWCは資源管理を強化するために、1960年に「三人委員会」を発足させて、膨大な捕鯨資料を捕鯨国から集めて、南極海捕鯨の主要鯨類資源の資源解析が開始された。鯨研はそれまでに蓄積した膨大な調査資料を集計、提出して、この委員会の活動に大きく貢献した。しかし、これらの資料を自ら解析して、この委員会を構成した3人（後に4人）の資源動態学者と論議で渡り合うことのできる数理、統計研究者は、鯨研には存在しなかった。そのために大村は水産庁・東海区水産研究所数理統計部の土井長之に応援を求めざるを得なかった。それ以後土井が日本の鯨類資源研究陣に組み込まれ、IWCの科学委員会に参加するとともに、鯨研の研究者に大きな学問的刺激を与えた。

大村は鯨研所長として、厳しい研究所の運営に指導性を発揮し、政府、業界との捕鯨問題の

調整と国際研究協力を努めた功績は大きい。彼は苦勞の多い経営の傍ら、ニタリクジラの種類を確立し、鯨類の骨学研究を深めるとともに、クジラについての解説文を多くの本や雑誌に発表した。また、彼は戦前にも国際捕鯨会議に参加し、戦後はIWCの年次会議に1951年から1976年まで連続26回参加し、科学委員会の長老として活躍し、洗練された国際人だった。彼の業績と人柄については、「第二鯨学事始」や「鯨博士大村秀雄さんを偲ぶ」に詳しい。

行動力に優れた西脇は、「トキワ荘」時代に鯨類資源生物学の分野で幅広い研究業績を上げた他に、海獣類学にも研究の幅を広げ、近代的な海獣水族館の建設を指導し、「鯨類・鳍脚類」は当時貴重な海獣類の教科書であった。西脇が神谷と共著で発表したイチョウハクジラは日本人が発見、命名した鯨類の新種であり、永遠に二人の名を留めている。水族館での鯨類飼育の指導者としても、西脇は偉大な足跡を残している。東大海洋研に移ってからは、世界を研究の場として活躍し、カワイルカ類や海牛類の海外学術調査隊を組織、指導し、優れた海獣類研究者を何人も輩出した。大隅（1984）は西脇への追悼文で彼の幅広い業績を紹介し、称えている。水江は早くに鯨研から長崎大学に移ったが、その後も大学で鯨類研究を続け、西日本海域の鯨類に関する多くの研究論文を発表した他に、何人かの海獣類研究者を弟子として育てた。

藤野は鯨類遺伝学の草分けであり、血液型による鯨類の系統群の判別を目指し、米国に移ってからはカツオの遺伝学を発展させ、北里大学ではさらに広く水産動物の遺伝学を手掛けた。最近彼の永い研究の足跡を纏めた本が出版された（藤野、2003）。

根本は鯨研時代に鯨類の食性研究に道を切り開き、東大海洋研に移ってプランクトン学の権威となり、海洋研究所長や海洋学会会長を務めた。惜しくも60歳の若さで在職中に死んだが、彼の業績と追悼録は「根本敬久教授業績集」として纏められている。

大隅は西脇の指導を受けて鯨類資源生物学を発展させ、水産庁の研究所に移ってからは大村の薫陶の下でIWCの科学委員会関連の種々の国

際会議にこれまで参加して、鯨類の合理的利用と管理の実現のために力を尽くしている。遠洋水産研究所長を最後に退官した後に、日本鯨類研究所に就職し、理事長として現在も老骨に鞭打ちながら頑張っている。

市原は資源生物学を発展させるために工学の応用に関心を持ち、水産研究所に移ってからは水産生物のバイオテレメトリー技術の開発に貢献した。鯨研時代に、ビッグミーシロナガスクジラの研究により、この動物を亜種として独立させた。彼は東海大学教授として精力的に活動していたが、惜しくも50歳台の若さで世を去った。

奈須は東水大の海洋学の権威であった宇田道隆教授の弟子であり、大学卒業後鯨研に採用されて以来、捕鯨漁場学を確立すべく研鑽を積んだ。水産研究所に移ってからは、幅広い水産海洋学を発展させた。彼はその後、海洋水産資源開発センター、東海区水産研究所、水産資源保護協会を経て、郷里の宮崎県で「鯨博士」と慕われながら悠々自適の生活に入ったが、65歳で幸福裏に世を去った。

粕谷は卒業論文を末期の「トキワ荘」で西脇、大隅の指導の下で作成し、卒業後鯨研に採用された。彼の「トキワ荘」時代は長くはなかったが、その後東大海洋研究所資源生物部門、遠洋水産研究所外洋資源部、三重大学生物資源学部を経て、現在帝京科学大学で教育と自然保護研究に勉めている。彼は研究者として優れた素質と業績で世界に名を知られるようになったが、最近では海生哺乳類の保全よりも保護に偏り過ぎて、仲間の信頼を失っているのは、残念でならない。

大村、西脇、根本、市原、奈須の5人は惜しくもすでに亡くなっているが、水江、藤野、大隅、粕谷の4名は2003年現在健在である。

「トキワ荘」時代の鯨研の研究分野の中で反省すべき重要な部分は、前述のように、資源解析部門の研究者の欠如であった。当時の鯨研の研究員は生物研究者で占められ、彼らは資源解析の基礎である、捕獲鯨の資源生物学的調査と研究に追われていた。また、スポンサーが捕鯨業界であったため、本来は国でやるべき鯨類資源の管理に直接関係する資源解析研究が意識的

に避けられていたこともあろう。水産庁・遠洋水産研究所に鯨類資源研究部門が設立されたのもそのためである。さらに加えれば、当時の調査は標本を捕獲鯨に頼って受身であり、最近の鯨類捕獲調査のように、研究者が資源調査を設計して、調査船を自由に使って、組織的に調査を実行することは、考えもできなかった。

さらに反省すべき点は、研究所が致死的研究研究方法に徹して、非致死的方法による調査研究は、水族館における行動観察研究がわずかになされた程度であった。もっとも、この時代は世界的にも鯨類資源の非致死的方法による研究は未発達であった。

「トキワ荘」時代の鯨研の業績

「トキワ荘」時代の鯨研の運営に当たった役員は、前述のように、当代一流の、進歩的な研究者で構成されていた。しかも、捕鯨は国際性が強く、その上に当時占領軍のGHQが捕鯨行政を指導していた。このような背景を持って発足した鯨研は、研究報告を英文で発行することに最初から方針が定められた。最近でこそ日本の学界や研究所の研究報告は英文で発表する例が主流になってきたが、半世紀以上も前に研究報告をすべて英文で発表する例は日本では稀であった。鯨研は発足の最初から世界の鯨類研究者を読者の対象にして、世界的に研究の成果を問おうとする、大きな意気込みで研究が進められたのである。

研究所のこの英断によって、「英文報告」と所員に略称された、前述の「Scientific Reports of the Whales Research Institute」誌は、年報として発行され、世界の鯨類研究機関に送付された。この「英文報告」はすぐに、世界の鯨類研究者に名が知られ、よく読まれ、多く引用されるようになり、鯨研の研究は世界水準に達した。しかし、この研究報告は英文で書かれたから、国内の捕鯨関係者に読んで頂くには不向きである。そこで研究成果を国内に普及させることを目的として、「鯨研通信」誌が発行されるようになったのである。このPR誌の発行の経緯と経過については、大隅（1998）が同誌400号に

紹介している。

「鯨研通信」誌は鯨研が発足した翌年の1948年8月に第1号が発行された。今では多くの研究機関や会社がPRのためにニュースレターを発行しているが、半世紀以上もの昔の、しかも敗戦直後の社会の混乱期に、この種の出版物が発行され、それが日本鯨類研究所に移った現在まで継続しているのは珍しく、「英文報告」の発行とともに、鯨研創設当時の経営者の卓見と進歩性は高く評価されよう。

「鯨研通信」誌は創刊以来「トキワ荘」時代を通じて月刊であり、編集作業は若手の研究員が担当した。若手編集員には鼻っ柱の強い連中が揃っていて、海洋学の大神所であった宇田道隆の原稿でも、編集会議で厳しく批判され、書き直させられたほどであった。そして所員の人数が少ないので、頻繁に記事の執筆の番が回ってきた。大隅は“原稿を書くのが今でもそれほど苦にならないのは、この時代に「鯨研通信」の発行で鍛えられたお陰である”と述懐している。因みに、大隅は「トキワ荘」時代の14年間に、「英文報告」に12編、学会誌に4編の研究論文、調査報告書8編、「鯨研通信」に35編、一般誌や新聞に10編の主著論文や署名記事を書いている。

鯨類研究所のその後

鯨研の「トキワ荘」時代は前述のように、1965年に研究所が勝どきから越中島に移転した時点で終わった。そして、鯨類資源の調査研究の場は1966年から東海区水産研究所、その翌年に遠洋水産研究所に移り、鯨研は鯨類資源の管理に関係しない骨学や分類学などの基礎的分野と食性や漁場環境の調査研究に専念することになって、第2期を迎えた。

越中島に移転した鯨研は借地の上に2階建ての小ぢんまりした建物を建て、一階が日本捕鯨協会と標本室、二階が鯨研の研究室として使用された。鯨研は、北海道大学から佐竹（高橋）裕子と東京水産大学から町田三郎（海洋学）、1967年に北海道大学から河村章人（食性学）が新たに鯨研に研究員として採用され、永吉や城

らの事務職員とともに、大村を助けて頑張った。また、宮崎一老は捕鯨協会の職員であったが、昔から鯨類について関心を寄せていたので、「鯨研通信」の編集を積極的に助けた。1971年に米国から帰国した藤野は、翌年北里大学水産学部に移る前の半年間鯨研に再び籍を置いた。

しかしながら、日本の捕鯨の状況はその後もIWCによる捕獲割当量の度重なる削減によってさらに悪化し、IWCが決定した「新管理方式」による捕獲枠の大幅な削減に適應するために、1976年3月に捕鯨6社が合同して、日本共同捕鯨株式会社が設立された。また、捕鯨協会理事長の藤田がこの会社の社長に就任したのを受けて、大村が協会理事長兼鯨研所長となった。それに伴い、協会は実質的に日本共同捕鯨内に吸収され、会社の中に協会的仕事を行うIWC会議対策チーム（後に国際捕鯨会議対策室）が組織された。大村は1976年からIWCの年次会議に参加しなくなった。会社の設立とともに、鯨研の運営は益々困難となり、1977年に再びリストラがなされ、河村は北海道大学水産学部、町田は水産海洋開発センターに移って、大村の他に所員は高橋と村山房子（経理）だけとなった。加藤（1994）によれば、大村が鯨研の店仕舞いを考えた時が2回あったという。初めは「トキワ荘」の住人が次々に去った時であり、2度目がこの時であったという。しかし、その後日本がIWCの事態を解決するために、P. ベスト（南アフリカ）と大隅が相計って提案した、「国際鯨類調査10年計画（IDCR）」の一環としての南極海の鯨類目視・標識調査に積極的に参加し、鯨研から調査員を派遣することになって事態は突然に好転した。そしてそのために、第1回（1978/79）IDCR航海を経験した北海道大学水産学部大学院生の加藤秀弘（資源生物学）が、帰還後の1979年に捕鯨業界や遠洋水研の支持を受けて鯨研に採用されて、大村は再び息を取り直し、青木（後に白木原）美紀と、村山の後任に武井裕子（経理）を採用して、鯨研の経営を続けた。鯨研には後に、青木の後任として白井（後に吉岡）都志江、さらに非常勤ながら東大農学部院生の吉岡基（繁殖学）や伊藤春香（解剖学）が加わり、小所帯ながらも研究活動を続

けた。

鯨研の運命は1982年にIWCが商業捕鯨のモラトリアムを決定したのに伴って、さらに厳しくなった。地主であり、スポンサーであった大洋漁業によって越中島から追い出しを食った鯨研と捕鯨協会は、1982年に江東区大島の大島ビルの二階を借りて移転し、規模をさらに縮小した。1985年には日本がそれまで異議の申し立てを続けていた商業捕鯨のモラトリアムを、米国の圧力によって、北洋漁業の權益を守るために、受け入れ、南極海母船式捕鯨は1987年の漁期終了を持って中断した。1987年11月に鯨類捕獲調査の用船会社として共同船舶株式会社が創立され、1988年1月に日本共同捕鯨株式会社は解散した。また、財団法人・日本捕鯨協会が1987年7月に解散し、この協会は現在、任意団体となって活動している。日本捕鯨協会の下部組織であった鯨研も、従って協会と同時に解散したことになる。

同年10月に、捕獲調査の実施機関としての、財団法人・日本鯨類研究所(日鯨研)が日本捕鯨協会と鯨類研究所の財産を引き継いで、水産庁の認可団体である別組織として設立された。そして、池田郁夫が水産庁・養殖研究所長を退官して理事長として就任し、遠洋水産研究所から移ってしばらく日本捕鯨協会常勤理事であった長崎福三が専務理事となった。また、「トキワ荘」の住人であった根本と大隅は、それぞれ東大海洋研究所と遠洋水研に在職中であったが、ともに日鯨研の評議員に就任した。鯨研所長の村は顧問として、鯨研所員の加藤は主任研究員として、日鯨研に移った。しかし、加藤は間もなく、新設された大型鯨類研究室長として遠洋水研に転出した。また、日本共同捕鯨株式会社からは藍武二、山村和夫、笠松不二夫が日鯨研に職員として移ってきた。さらに、共同捕鯨に向向していた武井が戻り、東京水産大学教授の田中昌一も、理事に加わった。かくして、一旦は滅んだ「トキワ荘」からのクジラ研究の体制が、別の形でどうにか再生した。

「鯨研」の名は「日鯨研」の設立によって消滅したが、鯨研に奉職した職員は大村の人柄を慕って結束が固く、OB、OGを中心として結成

した「鯨研会」は、会員が時々集まり、旅行をしたり、会食したりして、古き、よき「鯨研」時代を楽しんでいる。鯨研会は1993年に大村の死によって精神的支柱を失った今も、新規加入なしに存続し、時々会合して、親睦関係を保っている。

おわりに

鯨類研究所が勝どきの地を離れてから、「トキワ荘」の建物は取り壊され、現在は高層アパートが建っていて、昔を偲ぶ何物も残っていない。道路を隔ててあった、水産庁・東海区水産研究所は組織改定によって水産庁・中央水産研究所に名称を変更し、間もなく横浜の新庁舎に移転して、土地は売却され、堀と一部の建物だけが未だに取り壊されずに、まだ幽霊屋敷のように残っている。「漫画家のメッカ」であった本物の「トキワ荘」も、既に1982年に取り壊されている。

「トキワ荘」の漫画家も、「鯨研」の研究者も、敗戦のどん底に喘いでいた日本を早く復興させようとする情熱に日本中が燃えていた、戦後社会の昂揚期が生み出した時代の産物であったと思われる。そして、「トキワ荘」時代を過ごした日本人は、漫画家とクジラ研究者だけではない。その時代には、多くの職業分野の人々が、それぞれの「トキワ荘」で、生きるために夢中になって働いていたに違いない。それらの日本人の強烈なエネルギーが、日本の戦後の驚異的な社会復興と経済発展を支えたのであると、NHKテレビの「プロジェクトX」を見る度に、強く感じる。

バブル経済が弾けてから未だに立ち直れずにいる日本は今、色々な分野で沈滞ムードが横溢しているように見える。この時代こそ、それぞれの分野で「第二トキワ荘」が生まれ、そこで生活する人々によって、新たな飛躍の時代を築くであろうことを期待する。

鯨類研究所の遺産を受け継いで1987年に再出発した日鯨研は、創立からはや16年が過ぎた。この研究所も困難であった創生期を過ぎて、発展期に入っている。そして、常勤研究職員の数

は2003年現在「トキワ荘」時代の3倍にもなり、未だに自前の研究所の建物を持ってないものの、研究所の設備も、研究分野も、「トキワ荘」と比較にならないほどに充実してきている。この日本鯨類研究所が、捕鯨問題を巡る依然として厳しい国際情勢の下で、鯨類資源の専門研究機関として、さらに大きく飛躍することを祈りながら、筆を置く。

参考文献

- . 1959 . 座談会・100号を記念して。
鯨研通信、100：3 - 9 .
- 藤野和男.2003. 海洋・増養殖水産生物集団遺伝学
研究50年の軌跡。文芸社、227頁。
- 丸山勉 . 1959 . 「鯨研通信」の思い出。鯨研通
信、100：1 - 3 .
- 大村秀雄 . 1986 . 第二鯨学事始。講談社出版サ
ービルセンター、381頁。
- 大村秀雄博士を偲ぶ会（編）. 1994 . 鯨博士大
村秀雄さんを偲ぶ。200頁。

- 大隅清治 . 1984 . 西脇昌治会長の死を悼む。哺
乳動物学雑誌、10（2）：111 - 114 .
- 大隅清治 . 1991 . うたかたのクジラ研究の場。
月島・東海区水産研究所開設40周年記念特
集号、46 - 51 .
- 大隅清治. 1998 . 「鯨研通信」50年、400号の出
版活動を振り返って。鯨研通信、400：1 -
5 .
- 小川鼎三 1950. 鯨の話。中央公論社、211頁。
- 加藤秀弘. 1994. 大村所長。p. 52 - 61. 大村秀
雄博士を偲ぶ会（編）. 1994 . 鯨博士大村
秀雄さんを偲ぶ。200頁。
- 東京大学海洋研究所. 1960 . 根本敬久教授業績
集。
- 徳山宣也（編）. 1992 . 大洋漁業・捕鯨事業の
歴史。自費出版、825頁。
- 徳山宣也（編）. 2000 . 年表で綴る大洋漁業の
歴史（私家版）. 1247 + 50 + 3頁。
- 徳山宣也（私信）. 2002 . 林兼水産工業株式会
社の歴史。

日本鯨類研究所関連トピックス (2003年9月～11月)

当研究所評議員会・理事会の開催

9月12日に当研究所の評議員会並びに理事会
が開催され、平成15年度（H15.10.1～H.16.9.30）
の事業計画と予算案、及び平成14年度における
特別基金財産の処分方法の件が審議され、原案
通り承認された。

第45回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標
記会合が、9月19日午後当研究所会議室にお
いて33名の参加の下で開催された。今回は遠洋
水研の辻祥子氏が「調査漁獲、国際裁判とその

後の研究をめぐる状況」、同じく高橋紀夫氏が
「調査漁獲から得られたもの～CPUE再考へ」、
平松一彦氏が「CCSBTで開発中の管理方式
（Management Procedure）について」と題する
話題を提供し、各話題について質疑応答が行わ
れた。

SOWER計画会議の開催

9月24日から27日までの4日間、当研究所会
議室において2003/04年度SOWER計画会議が
開催された。パニスター元IWC科学委員会議長
を始めとする6名の海外からの専門家と、当研

研究所役員8名を含む調査船幹部等30余名の関係者が出席した。調査は南極海V区東側海域で実施されることになっている。

アンテナショップの開設

鯨製品に対する需要や消費者の意識に関する動向を把握することを主目的としたアンテナショップの開設準備が進められた。その1号店が10月1日に大阪梅田の阪急百貨店地下にオープンした。流通・販売に係わる種々の情報収集の他、捕鯨問題に理解を得るための情報発信の場、更にはいつでも鯨製品が購入できる場所としても期待されている。

2号店は東京で来年3月にオープンする予定である。

第2昭南丸の火災

オホーツク海での目視調査を終えて、内海造船(株)瀬戸田工場(広島県)に入梁中であった第2昭南丸で、10月17日夜火災が発生した。

原因は確定されなかったが、主としてアッパーデッキ上の居住区部分が焼損した。船内に宿泊者はおらず怪我人はいなかったが、熱や煙により計器類の多くも被害を受けた。その後、造船所側の懸命な復旧作業により、同船は予定通り11月27日にSOWER調査航海に出港した。

創立記念日の式典

当研究所の創立記念日は10月30日であるが、当日が国際シンポジウムの開催日と重なったため27日に繰り上げ、JARPA並びにSOWER航海に乗船する14名の調査員の壮行会を兼ねての実施となった。

海洋生物資源の持続的利用シンポジウムの開催

10月30日から3日間、品川で表題のシンポジウムが開催された。39カ国から83名(日本人含む)が参加し、海洋生物資源の利用に関する

IWC、CITES並びにFAO等の国際機関の活動を中心とした検討がなされた。一部の参加者はシンポジウム終了後に、宮城県気仙沼市を訪れ、サメ類の利用実態などを見学した。

JARPA調査船団の出港

11月7日、第17次JARPA出港式が、田原水産庁長官も臨席して、下関市あるかぼーと岸壁で実施された。家族や市民約500名が見送る中、日新丸、第2共新丸、勇新丸、第1京丸、そして第2勇新丸の順で離岸し、南極海に向かった。

販売勉強会の開催

11月12日、当研究所会議室で、第2次JARPN 調査副産物の販売に係わる勉強会が開催された。

伝統捕鯨地域サミット検討会の開催

第3回目となる伝統捕鯨地域サミットの準備のための検討会が10月10日並びに11月14日に開催された。同サミットは、来年5月30日に高知県室戸市で開催する予定となった。

第46回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標記会合が、11月25日午後当研究所会議室において21名の参加の下で開催された。今回は東北水研の上田祐司氏が「北海道南部太平洋マダラの体重コホート解析による資源量推定と資源診断」、道立中央水試の山口宏史氏が「北海道太平洋ケガニの甲長コホート解析による資源量推定」と題する話題を提供し、各話題について質疑応答が行われた。

当研究所評議員会・理事会の開催

当研究所評議員会並びに理事会が11月28日に所内会議室で開催され、平成14年度の事業報告並びに収支計算が審議され、原案通り承認された。

日本鯨類研究所関連出版物等 (2003年9月～11月)

【印刷物】

- 当研究所：捕鯨をとりまくこの1年 2003年(前期) . 202pp . 日本鯨類研究所, 2003/9 .
- 当研究所：水産資源管理談話会報 32 . 26pp . 日本鯨類研究所, 2003/9 .
- 当研究所：鯨研通信 419 . 32pp. 日本鯨類研究所, 2003/9 .
- 当研究所：鯨研叢書 10 . 61pp. 日本鯨類研究所, 2003/9/30.
- 当研究所：財団法人日本鯨類研究所要覧. 8pp. 日本鯨類研究所, 2003/10/1.
- 当研究所：The Institute of Cetacean Research Prospectus. 8pp. The Institute of cetacean Research, 2003/10/1.
- Goodman, D : Whaling culture. *New Scientist* 180 (2417). 32, 2003/10/18.
- ゲットマン, ダン : 行き過ぎたIWC . 鯨研通信 419:1-7, 2003/9.
- 小西健志 : アニサキスの生態学的研究 スケトウダラを例にして . 鯨研通信 419 : 7-14, 2003/9.
- Matsuoka, K., Ensor, P., Hakamada, T., Shimada, H., Nishiwaki, S., Kasamatsu, F. and Kato, H. : Overview of the minke whale sighting survey in IWC/IDCR and SOWER cruises from 1978/79 to 2000/01. *J. Cetacean Res. Manage* 5(2):173-201,2003/11.
- Nishida, S., Pastene, L. A., Goto, M., Kanda, N : SRY gene structure and phylogeny in the cetacean species. *Mammal Study* 28:57-66, 2003.
- 西脇茂利 : マオリクジラ - 自然と共に生きるということ . *GARDEN CINEMA EXPRESS* 100, 2003/9/13.
- 大隅清治 : ご挨拶 . 鯨友会会報41 : 19-20, 2003/10 .
- 大隅清治 : 出港にあたって 捕獲調査は締約国の権利 . *水産タイムス*, 2003/11/17.
- 大隅清治 : 日本鯨類研究所・大隅清治理事長に聞くJARPAいよいよ大詰め 広報活動にも力を注ぐ . *みなと新聞*, 2003/11/25.
- 清家紀子 : 及川文庫の開設にあたって思うこと . 鯨研通信419 : 15-19, 2003/9.

【学会発表】

- Sachi Oki, S. I. Saitoh, H. Kiwada and K. Matsuoka: Relationship between Sei Whales distribution and the environmental conditions in the western North Pacific using multi-sensor remote sensing. PICES XII W2-945. Mayfield Hotel (Seoul Korea), 2003/10/10.
- Sachi Oki, S. I. Saitoh, H. Kiwada and K. Matsuoka : Variability of coastal and open ocean habitats of Sei Whales in the western North Pacific using multi-sensor remote sensing. PICES XII W5-9055. Mayfield Hotel (Seoul Korea), 2003/10/15.
- Tamura, T., Kato, H.:Long term changes in food and feeding habits of the common minke whales in the western North Pacific region. PICES XII W2-9051. Mayfield Hotel (Seoul Korea), 2003/10/10.

【放送・講演】

- 藤瀬良弘 : くじらと私 - 鯨を追って 北へ南へ . 勇魚会シンポジウム 東京工業大学, 2003/9/27.
- 大隅清治 : クジラ研究の「トキワ荘」時代 . 勇魚会シンポジウム 東京工業大学, 2003/9/27.

- 大隅清治：鯨類資源の合理的利用と管理のための調査研究．インドネシア海事漁業局 ジャカルタ，2003/10/6.
- 大隅清治：東南アジアにおける鯨類．インドネシア海事漁業局 ジャカルタ，2003/10/6.
- 大隅清治：日本における鯨類資源調査研究．インドネシア漁業研究センター ジャカルタ，2003/10/7.
- 大隅清治：日本はなぜ捕鯨にこだわるのか．青森魚食文化協会 青森ホテル，2003/10/28.
- 大隅清治：東南アジアの鯨類について．東京海洋大学海鷹祭．東京海洋大学品川キャンパス，2003/11/2.
- 大隅清治：「鯨楽句談」 能登の海物語 パネリスト参加(能都町のクジラを活かした活動への提言)．くじらフォーラム．能登北辰高等学校，2003/11/8.
- Pastene, L. A. : Manejo y conservación de las grandes ballenas en el contexto de la Comisión Ballenera Internacional (CBI) - incluyendo la posición de Japón en la CBI-. チリの外務省(鯨と捕鯨問題検討グループ)．Santiago, Chile, 2003/10/28.
- Pastene, L. A. : Manejo y conservación de las grandes ballenas en el contexto de la Comisión Ballenera Internacional (CBI) - incluyendo la posición de Japón en la CBI-. チリの水産庁．Valparaiso, Chile, 2003/10/30.

【新聞記事】

- ・ どうなる日本の捕鯨 脱退も視野に議論継続 全面保護に向かうIWC：産経新聞 2003/9/1.
- ・ 日本伝統捕鯨地域サミット 牡鹿町が開催辞退：河北新報 2003/9/30.
- ・ 鯨研 大阪・梅田にアンテナショップ 東京にイトンも計画：みなと新聞 2003/10/1 .
- ・ 鯨研が阪急梅田店にアンテナショップ：みなと新聞 2003/10/3.
- ・ 漁船保険情報 海外漁業情報 703 国際漁業 多くの種類のクジラを目視 北西太平洋鯨類捕獲調査 食性も徐々に明らかに：日刊水産経済新聞 2003/10/23.
- ・ 「江戸東京湾くじらマップ」 日本鯨類研究所が出版 クジラに出会う旅ガイド：日刊水産経済新聞 2003/10/24.
- ・ きょう下関を出港 南氷洋鯨類調査船団 ミンク400頭を調査：日刊水産経済新聞 2003/11/7 .
- ・ きょう下関港から出港 今年度の南氷洋鯨類捕獲調査船団：日刊水産通信 2003/11/7.
- ・ 南氷洋鯨類捕獲調査船団きょう下関から一斉出港：みなと新聞 2003/11/7.
- ・ 南氷洋調査捕鯨船団がきょう下関から一斉出港：新水産新聞(速報版) 2003/11/7.
- ・ 調査積み重ね捕鯨再開へ 日新丸船団が下関出港 南氷洋鯨類捕獲調査：日刊水産経済新聞 2003/11/10.
- ・ 南氷洋鯨類捕獲調査船団 全船そろい下関出港：みなと新聞 2003/11/10.
- ・ 2003年夏期調査主要鯨発見群数/頭数予備集計：水産タイムス 2003/11/17.
- ・ 南氷洋鯨類捕鯨調査船団、下関から出港 凍てつく荒波乗り越え 科学的知見を収集：水産タイムス 2003/11/17.
- ・ 2年半で30万アクセス 鯨ポータル・サイト：みなと新聞 2003/11/25.
- ・ 「江戸東京湾くじらマップ」作製 首都圏の鯨スポット紹介 鯨研：みなと新聞 2003/11/25.
- ・ 南極海、区を調査 環境から生態まで広範に：みなと新聞 2003/11/25.
- ・ 日新丸船団 下関から南極海へ 大きな意味もつ航海 公明正大な鯨調査に誇り 下関港に500人集う 関門海峡から一路南進 日新丸出港式：みなと新聞 2003/11/25.
- ・ 日新丸船団の調査成功を祈る 関係者の声 出港式から：みなと新聞 2003/11/25.
- ・ 捕鯨再開へ強い足取り 持続的利用派が拡大 IWC動向：みなと新聞 2003/11/25.

- ・解説 2003/2004年南極海ミンククジラ捕獲調査 (JARPA) : 日刊水産経済新聞 2003/11/26.
- ・日新丸、南極海に向け下関を出港 下関市民ら700人が見送り 出港式であいさつする関係者: 鯨食文化を支える重要な業務 調査船団の無事を祈る: 日刊水産経済新聞 2003/11/26.
- ・日本鯨類研究所・大隅清治理事長 東京海洋大学「海鷹祭」で講演 「東南アジアの鯨類について」まず鯨類資源に関心を: 日刊水産経済新聞 2003/11/26.
- ・SOWER 広島・瀬戸田きょう出港: みなと新聞 2003/11/27.
- ・日本鯨類研究所 鯨肉1,346トン、販売開始へ ミンク ニタリ キロ2,600円、イワシ2,800円: 日刊水産経済新聞 2003/11/28.
- ・日本鯨類研究所 ミンク、ニタリ赤肉キロ2,600円 白手物は一部値下げ 北西太平洋鯨類捕獲調査副産物販売: みなと新聞 2003/11/28.
- ・南太平洋鯨類調査船団が出発: 日刊水産経済新聞 2003/11/28.
- ・ニタリ・イワシ鯨の一部価格を下方修正 鯨研が10次北西太平洋調査の副産物1,346.2.4 トンを販売: 新水産新聞 (速報版) 2003/11/28.
- ・IWCの南大洋鯨生態調査へ目視調査船1隻が出港: 新水産新聞 (速報版) 2003/11/28.

【雑誌記事】

- ・2003年度第2期北西太平洋鯨類捕獲調査 (JARPN) 終了 ~ 北西太平洋における鯨類調査の結果 ~ ミンク・ニタリなど捕獲対象外の鯨種を発見, "捕獲鯨の胃内容物から小中型の魚種多数発見 水産庁: 水産世界 2003/9/15 .
- ・書評 大隅清治著「クジラと日本人」. 食の科学 2003/9.
- ・ヒューマン・スケッチ『あらゆる可能性を求めて』(財)日本鯨類研究所理事長 大隅清治: 水産週報 2003/11/5 .
- ・大隅清治著 クジラと日本人: 農林水産図書資料月報 2003/11/15.
- ・元所長大隅清治さんの叙勲を祝す: 遠洋水産研究所ニュース 2003/11/25.
- ・日新丸船団が下関を出港: 水産週報 2003/11/25 .

京きな魚 (編集後記)

長い年末年始休暇を目前に控えています、休むこと無く南極海での調査をしている仲間がいることを思うと、ちょっと複雑な気持ちになります。

大木阪氏の鯨の「トキワ荘」に登場する全ての人物の顔を思い浮かべる事が出来た方が何名おられたことでしょうか。玄関前での集合写真にいた佐藤孝氏も今夏急逝されてしまいました。銘酒浦霞と鯨一頭分何でも食べさせることを看板に「新宿樽一」を経営される傍ら、鯨食文化の継承に努力され続けた方でした。

「トキワ荘」時代の半分以下の人数で出発し

た日鯨研ですが、現在は逆に2倍以上の職員を抱える規模となりました。もちろん私自身は確認する術もありませんが、この職員達が50年後に大木阪Jr.からどのように評価されるのが楽しみです。

トキワ荘があったからこそ、その後に漫画ブームが起こったように、今は蛹でもやがて脱皮して鯨研時代の先輩を超える研究を始める職員が続出するに違いありません。

鯨研究の新時代の始まりが初夢だけに終わらないことを願って筆を置くことにします。良いお年をお迎えください。 (山村和夫)

ストランディングレコード (2003年9月~11月受付)

登録番号	和名	詳細	雌雄	都道府県	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	信篤源	標本	備考	
0-1482	アザメ	B	1	愛知	津美郡津美町西ノ浜(三河湾/伊勢湾)	20030130	漂着	死亡	1.24		中村みつ子	志摩半島野生物研究会	若林郁夫(志摩半島野生生物)終由			
0-1483	アザメ	B	1	愛知	津美郡津美町西ノ浜(三河湾/伊勢湾)	20030130	漂着	死亡	1.50	損傷激しい。	中村みつ子	志摩半島野生物研究会	若林郁夫(志摩半島野生生物)終由			
0-1484	アザメ	B	1	愛知	津美郡津美町西ノ浜(三河湾/伊勢湾)	20030421	漂着	死亡	1.31		中村みつ子	志摩半島野生物研究会	若林郁夫(志摩半島野生生物)終由			
0-1485	アザメ	B	1	愛知	津美郡津美町西ノ浜(三河湾/伊勢湾)	20030421	漂着	死亡	0.82		中村みつ子	志摩半島野生物研究会	若林郁夫(志摩半島野生生物)終由			
0-1474	アザメ	B	1	三重	安芸郡河芸町河芸(伊勢湾)	20030531	漂着	死亡	0.71	腐敗、表皮無し。	久志鉄平・吉岡 風	三重大学生物資源学部	無し		埋却。	
0-1475	アザメ	B	1	三重	安芸郡河芸町河芸(伊勢湾)	20030604	漂着	死亡	0.69	腐敗。	久志鉄平・吉岡 風	三重大学生物資源学部	無し		埋却。	
0-1480	オミシカ	A	1	北海道	津海津町津海津(根室海峡)	20030710	漂着	死亡	0.65	新生児と思われる。	佐藤晴子	シラウワウチ	第一報告者；津海津町経済部水産課)			標津町が根室市廃棄物処理場に埋却。
P-197	ゴマツナシ	A	1	北海道	津海津町津海津(根室海峡)	20030712	漂着	死亡		頭部切断。残部体長99cm。	佐藤晴子	シラウワウチ	第一報告者；津海津町経済部水産課)			標津町が根室市廃棄物処理場に埋却。
0-1489	アザメ	A	1	福島	原町市東北畜力所内	20030717	漂着	死亡	1.02	比較的新鮮無し。詳細計測値有り。	平治隆	ふくしま海洋科学館	全身冷凍(ふくしま海洋科学館)皮層(日録研)			6:00AM発見。ふくしま海洋科学館が回収調査。
0-1481	ウチカ	C	1	北海道	津海津町津海津(根室海峡)	20030722	漂着	死亡	1.99	腐敗顯著。	佐藤晴子	シラウワウチ	第一報告者；山崎忠仁(標津町経済部水産課)			標津町が根室市廃棄物処理場に埋却。
0-1487	マツシカ	B	1	沖縄	石垣市星野通段川河口南裏200m(石垣島)	20030830	漂着	死亡	2.10		小菅文治	西海区水産研究所石垣支所	岡田正吉(Atelier Porpoise)終由			11:50PM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-083。
M-516f	ミツクサ	A	1	富山	水上市宇波沖(富山湾)	20030901	漂着(浮網)の位置不明)	生存→死亡	4.40		滝元英一	瀬深定漁業組合		DNA標本(日録研)		6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-083。
0-1476	アザメ	A	1	愛知	知多郡美浜町野間新田灯台沖574m(伊勢湾)	20030903	漂着(浮網)	死亡	1.67	前歯がやや腐敗。詳細計測値有り。	川田伸一郎・夏目明香/池底也	名古屋大学大学院海知多ヒューマン	第一発見者；石山紀生	脂皮・筋・肝・腎・精巢(ヒューマン)、骨格(愛知学院大)、頭部(心臓(三重大))		調査後埋却。
0-1477	アザメ	A	1	愛知	知多郡南知多町豊浜新居豊浜漁港(伊勢湾)	20030906	漂着	死亡	1.69	詳細計測値有り。	大池辰也・津井康行・近藤 介・田中聖彦	南知多ヒューマン	第一発見者；相川勇次	脂皮・筋・肝・腎・精巢(ヒューマン)、骨格(愛知学院大)、頭部(愛知学院大)		14:00発見。調査後埋却。
0-1478	アザメ	A	1	愛知	知多郡南知多町山海大泊海岸(伊勢湾)	20030906	漂着	死亡		腐敗顯著。後肢欠損。	大池辰也・津井康行・近藤 介・田中聖彦	南知多ヒューマン	第一発見者；津井康行(南知多ヒューマン)	無し		16:00発見。調査後埋却。
M-517f	ミツクサ	A	1	長崎	北松浦郡生月町里免字妙見地先	20030909	漂着(大型定置網)	生存→死亡	4.80		井元達男	生月漁業協同組合		DNA標本(日録研)		7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-084

登録番号	和名	群	群	都道府	位置	西暦年月	状況	生死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
M-527f	ミナヅナ	A	1	富山	氷見市水見沖(富山湾)	20031017	混獲(定置網)	生存→死亡	3.00		梶野一夫	水見漁民合同組合		DNA標本(日鯨研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-094
0-1494	7筋ワカサギ	A	1	福島	いわき市平置間二見ヶ浦海岸	20031018	漂着	生存→死亡	5.16	外傷無し。詳細計測値有り。	平治隆	ふくしま海浜科学館		脂肪・心・肺・肝・腎・脳・生殖器・小腸・筋・寄生虫・骨格(7枚写真)ふくしま)脂肪(日鯨研)	6:00AM頃発見。発見後しばらくして死亡。胃内容物類口のみ。7枚写真ふくしままで郵送。
M-528f	ミナヅナ	A	1	北海道	紋別郡興部町地先	20031021	混獲(約定定置網)	死亡	4.85		横内武久	沙留漁業協同組合		DNA標本(日鯨研)	6:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-095 調査後埋却。
0-1497	アサリ	A	1	愛知	知多郡美浜町河和八反田河和浦戸港地区(三河湾)	20031021	漂着	死亡	1.83	比較的新鮮。詳細計測値有り。	石室守・新川智穂・三反田香	南和多七(水)		無し	調査後埋却。
0-1498	ホコソウ	B	1	神奈川県	横浜市長見区大黒埠頭(富山湾)	20031024	港内迷入	生存		体長約2m。岩部全体か?	徳武浩司・大津人	横浜・八景馬場・ソウパライ	第一報告者；鈴木秀隆(神奈川県新聞)	無し	031026鶴見川に出現。031101千葉県千葉市中区豊阿町郡川の堤防付近に産獲。消防署警察署員らが救助後自力で湾内に戻った。他報告者；村瀬弘人・久場朋子(日鯨研)・坂野みちる(海の哺乳類情報やふ)。asahi.com/31027_朝日/共同通信2-2速報031101。
M-531f	ミナヅナ	A	1	新潟	新潟市大北小浜沖(佐渡島)	20031027	混獲(大型定置網)	死亡	6.70		伊藤千秋	内海府漁業生産組合		DNA標本(日鯨研)	7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-097 調査後埋却。
0-1500	アサリ	B	1	三重	津市相楽町千鳥ヶ浜(伊勢湾)	20031027	漂着	死亡	1.10	腐敗顕著。	半田俊彦・田正美	鳥羽水族館		無し	
M-529	サトウカサガ	A	1	三重	桑名市赤須賀福要川河口(伊勢湾)	20031028	漂着	生存→漂流		体長約7.8m。	伊藤美	三重大学生物資源学部		無し	
M-530f	ミナヅナ	A	1	北海道	白根郡白根町地先(根室海峡)	20031029	混獲(特イ定置網)	生存→死亡	4.10		石黒勝三郎	石黒漁業		DNA標本(日鯨研)	7:15AMが霧籠りに迷入を発見。漁師の船で尾鰭を牽引し救助したが、13:00頃沈没に産獲。黒・取島町・地元漁師らが救助活動を行い、再度漁船で牽引。15:00頃河口沖7-8mで放流した。他報告者；中京TV報道部(大池辰也(告知多トコ・手打)・久野野みちる(海の哺乳類情報やふ)・久場朋子・和田淳(日鯨研)。共同通信・NHK・毎日・伊勢・読売・2速報031028。ICRY-03-096 調査後埋却。
0-1501	アサリ	B	1	愛知	津市福豆町真瀬(三河湾)	20031029	漂着	死亡	1.62	腐敗。詳細計測値有り。	川田伸一郎・夏目明香	名古屋大学大学院		脂肪・肝・脾(子安和弘)	
0-1504	アサリ	A	1	福岡	福岡市東区奈多漁港内	20031031	漂着	死亡	1.16	腐敗・性別不明。	中村雅之	マツカト・海の中道	第一発見者；井上龍介。		11:00AM発見。マツカト・海の中道が調査回収。他報告者；姪田啓(Aquatic Animal Consulting) 報告者は031111確認。
0-1503	サトウカサガ	A	1	東京	三宅村伊ヶ谷(三宅島)(伊豆諸島)	20031109	漂着	死亡		腹部膨満。体長約4.5m	田口周一	DOLPHIN CLUB-TAG			
M-532f	ミナヅナ	A	1	北海道	紋別郡興部町地先	20031111	混獲(約定定置網)	死亡	5.25		横内武久	沙留漁業協同組合		DNA標本(日鯨研)	6:40AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-098
M-533f	ミナヅナ	A	1	北海道	網走市能取岬地先	20031111	混獲(約定定置網)	生存→死亡	4.52		出口吉蔵	網走合同定置漁業		DNA標本(日鯨研)	12:00発見。地元配布の他、省令に基づき販売。ICRY-03-099
0-1507	アサリ	A	3	福岡	北九州市門司区榑杓田町麻杓田漁港内	20031112	港内迷入	生存			中村雅之	マツカト・海の中道		無し	7:00漁港から姿を消す。他報告者；姪田啓(Aquatic Animal Consulting)
M-538	ミナヅナ	A	1	長崎	平戸市平戸町大下地先	20031112	漂着	死亡	7.00	腐敗。	白濱信	平戸市		DNA標本(日鯨研)	14:00市職員が調査。発却予定。
M-534f	ミナヅナ	A	1	岩手	下閉伊郡岩手町小本(大内湾)	20031113	混獲(大型定置網)	生存→死亡	4.60		金澤勤兵衛	小本漁業協同組合		DNA標本(日鯨研)	5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-100
M-536f	ミナヅナ	A	1	富山	氷見市(富山湾)	20031113	混獲(大型定置網)	生存→死亡	4.70		濱元英一	氷見漁業協同組合		DNA標本(日鯨研)	省令に基づき販売。ICRY-03-102。

登録番	和名	評 詳	性 雌	都道府	位 置	西暦年月	状 況	生/死	体 長	生 物 情 報	報 告 者	所 属	情 報 源	標 本	備 考
M-535f	ミンクガウ	A	1	新潟	高津市和木地先 (佐渡島)	20031114	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	4.80		坂野久一	丸内定置網 組合		DNA標本(白鯨研)	7:30AM発見。網外へ出せうとすると死亡。地元配布の他、省令に基づき販売。
M-537f	ミンクガウ	A	1	富山	氷見市氷見沖(富 山湾)	20031114	混獲(定置 網)	生存→死亡	4.50		森本太郎	氷見四共漁 業組合		DNA標本(白鯨研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-103
0-1505	ｽｽﾞメ	A	1	福岡	北九州市小倉北 区白鳥沖(廣門湾 岬)	20031114	混獲(刺 網)	死亡	1.13		中村雅之	沖ノ井ト海 の中道		沖ノ井ト海の中道	7:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-103
0-1502	ｽｽﾞメ	A	1	愛知	幡豆郡一色町佐 久島東254休(三 河湾)	20031116	混獲(中 流し網)	死亡	1.41	詳細計測値 有り。	大池辰也・坂 田維里絵	南知多ビト 水*		頭骨・胃内容・脂 肪・筋・肝・腎(ヒト キト*)・心・眼(三重 大)	水深約20m。調査後埋却。
0-1506	ｽｽﾞメ	A	1	愛知	幡豆郡一色町佐 久島東2.54休(三 河湾)	20031120	混獲(中 流し網)	死亡	1.54	詳細計測値 有り。	大池辰也/中 忠臣・石川純 子・田口美穂・若 林けい・畑恵 子	南知多ビト 水*/三重大		頭骨・胃内容・脂 肪・筋・肝・腎(ヒト キト*)・胎皮・心・眼 (三重大)	早朝発見。水深約15m。03121博知多 ヒトキト*。三重大が調査後埋却。
M-540f	ミンクガウ	A	1	石川	鹿島郡能登島町 赤鷲目沖合	20031120	混獲(定置 網)	死亡	4.00		坂本康正	蟹目大敷網		DNA標本(白鯨研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-105
M-539f	ミンクガウ	A	1	富山	氷見市(富山湾)	20031121	混獲(大型 定置網)	死亡	4.33		酒元英一	瀬浦定置漁 業組合		DNA標本(白鯨研)	省令に基づき販売。ICRY-03-104。
M-541f	ミンクガウ	A	1	北海道	茅部町南茅部町 字川盛地先	20031122	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	4.70		鎌田光夫	南かやべ漁 業協同組合 川盛支所		DNA標本(白鯨研)	6:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-03-106
M-542f	ミンクガウ	A	1	石川	鳳至郡穴水町字 前渡地先	20031124	混獲(大型 定置網)	生存→死亡	5.00		橋本安幸	前渡大敷網		DNA標本(白鯨研)	省令に基づき販売。ICRY-03-108

*表中の「種」は鯨類判定の信頼性を区分しており、Aは白鯨研職員が調査や写真等によって鯨類を識別した場合、Bは他の研究者の方が鯨類の判定を行った場合、Cは鯨類の判定が不明で判定に疑問がある場合や、判定が推定による場合を示しております。また、「種」欄各項目は、調査記録簿の「種」欄のみに記入してあります。「体長」は肉で記載してあります。記録簿裏面の漢字の「O」はヒクジラ、「M」はヒクジラ、「P」は横山鯨(アシカ)を示します。「E」はエトランシ、「S」はシロイルカを示します。ICRYの分類(鯨類調査387)には未定は含まれていないものの、多少の誤差は許容してあります。

* (註) 日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、混獲した鯨類の情報(メタデータ)の収集、記録を行っております。ストラクチャリングを発見したり、新聞記事などの情報がございますら、ぜひ日本鯨類研究所までご連絡ください。